東洋文庫蔵『書物袋絵外題集』について

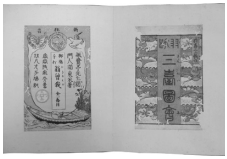
岡崎　礼奈

はじめに

東洋文庫の蔵書は現在約百万冊とされている。このうち、およそ二割が和書にあたり、国宝や重文を始めとする貴重書、古典籍の殆どは文庫の創設者である岩崎久彌氏（一八六五～一九五五年）が昭和七（一九三二）年から三期に渡って寄贈した書籍の中に含まれている。[1]「岩崎文庫」と呼ばれるこれらの書籍は、あらゆる分野の資料が揃い、年代も中世から近代にまで至るというまさに多岐多彩なコレクションである。なかでも江戸時代の版本、写本類が突出して蒐集されている。更に、とりわけ江戸時代中期から明治にかけて大衆向けに刊行された草紙類に関しては、著名な作品だけでなく、広く網羅的に集められていることが昭和九年に編纂された「岩崎文庫和漢書総目録」から分かる。[2]歴史上の英雄たちの活躍や当世の社会・風俗を反映した話題、子供向けの物語まで、バラエティに富んだ内容に挿絵を交え、読みやすい文章で著わした草双紙は、江戸の書物文化を支える人気を誇り、年単位で見ても数え切れぬほど刊行されていたと思われるため、自ずと蒐集数も大きくなったことと理解される。

江戸時代の書物は多くの場合、店頭で並ぶ際に「袋」というものが付けられていた。袋とは、書物を保護するための覆い紙で、本体（書物）を巻くような筒状をしている。[3] この袋の表面に描かれた絵ばかりを集めて綴じたのが、岩崎文庫の『書物袋絵外題集』である。

江戸時代の草紙類についてはテキストや挿絵、出版事情などの観点から既に様々な考察と論述が重ねられてきた。[4] しかし、書物が出版された当初の状態を包括的に考察できる「袋絵」に主眼を置いた論考は、私見ながら未だみられない。近世から近代の大衆的な書物文化の研究に寄与しうる袋絵という資料を改めて呈示し、誠に簡素ではあるが考察を加えるというのが、本稿の目的である。本稿では、まず『書物袋絵外題集』の体裁をはじめ、その概略について紹介したい。次に、袋絵の制作者について考察し、更なる研究の深化に繋げる緒言にかえたい。



図①『書物袋絵外題集』第一帖見開き

図② 同上表紙

一　『書物袋絵外題集』の概要

一―一

『書物袋絵外題集』は【図①】のように画帖仕立てになっており、見開きに二図ずつ書物の袋を貼り込んでいる。同じ体裁のものが全六帖あり、各帖の表紙には「書物袋繪外題集」と記された題箋が貼られている【図②】。寸法は

縦二六・三cm、横一九・八cmでいずれの帖にも蔵書印、奥書等はない。貼り込まれた袋の寸法が大体縦一六～一八・五cm、横一〇～一二cmであることから、書物の型としては中本（縦約一八・五cm、横約一二cm）サイズが主に適合する。(5)

袋絵は一帖目に四七図、二帖目に四八図、三帖目に五二図、四帖目に六〇図、五帖目に五二図、六帖目に五二図、あわせて三一一図ある。これらは、稀に墨摺り、単色摺りのものが含まれるものの、殆どが多色摺りで色合い美しく、図様にも機知に富んだものが多数見られる。そして、書物の題、作者、絵師、版元、時に刊行年と言った書誌情報が絵と共に摺られている例も少なくない【図③】。

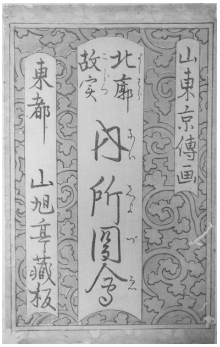
では、六帖の中には、どの年代に刊行された袋が収められているのか。次項では、いくつか袋絵の例を挙げてこれらの刊行年について考察したい。

図③　『敵討身代利名号　全』曲亭馬琴編／葛飾北斎画／仙鶴堂／文化五（戊辰春／1808）年新版【第一帖所収】

一―二　袋の刊行年について

袋絵が貼られている順番は時系列ではなく、あらゆる年代のものが前後しながら入り混じっている。しかし、書物の出版年を調べながら概観すると、天明～慶応の間、つまり江戸後期から幕末までの出版物の袋が集められていること、この中で古い時代にあたる天明、寛政期（一七〇〇年代）のものは殆どが一、二帖目に含まれている

ことが分かった。一例として、【図④】は「山東京傳画／北廓故実内所圖會」と記されていることから、天明六（一七八六）年に刊行された『北廓内所図会』（小金厚丸作、山東京伝画）の袋である。[6]また、【図⑤】には、木札が入る器に「天明四年甲辰春」と記されており、上部には四方赤良（大田南畝）の狂歌が入っている。現在把握しうる刊行年の中では本図が最も古いが、どの書物の袋に当たるのか判然としないため、今後の検討が必要といえよう。逆に最も年代が新しいのは、【図⑥】の「白縫／五十二へん／菊壽堂」と記された袋である。この袋には柳下亭種員作『白縫譚』が入っていたと考えられる。本作は九〇編にも及ぶ長大な作で、幕末から明治に渡って刊行された。その間に作者も絵師も変わっているのだが、図中に記された「五二へん」という情報から、二世柳亭種員作、落合（歌川）芳幾画で慶応三（一八六七）年に刊行された第五十二編の袋にあたることが分かる。芳幾は幕末から明治初期にかけて風俗図や新聞錦絵などを手掛けて活躍した浮世絵師で、【図⑥】のような役者絵も多く描いている。



図④　『北廓故実内所図会』小金厚丸作／山東京伝画／山旭亭蔵板／天明六（1786）年【第一帖所収】

図版のキャプションには、袋に記載が無い内容も判明している限りの情報を反映した。本の題や作者名などは袋の表記の通りではなく、現在の常用漢字に直している。図版の作品は全て東洋文庫蔵である。

図⑤　題不明
「天明四年甲辰春」の記が入っている【第三帖所収】

図⑤　年記部分

箱を展開した枠の中で、見得をきらんとする役者のきりりと上がる眼尻が何とも粋な図である。

次に、所収の袋絵の年代はどの様な割合になっているのか、具体的な数字を示してみたいと思う。参考資料として、現在までに判明した限りで、袋絵を出版の年号ごとに振り分けた一覧を四四頁表一にあげる。中には同じ図様が複数枚ある、あるいは同作品で異なる巻の袋というのもあるが、一枚ごとに独立した袋絵として算出した。

以上の考察から、『書物袋絵外題集』所収の袋の刊行年について総括すると、天明から寛政期、つまり一七〇〇年代にあたるのは一部であり、大半を占めるのが一八〇〇年以降、とくに幕末に刊行されたものといえる。ただし、これらの書物の中には明治時代に再版されたものが含まれている可能性も考慮しなければならないであろう。

ここから更に考えを進めると、誰がどの時点でこれらの袋を蒐集して画帖にまとめたのか、という疑問がうかぶ。先述のように蔵書印や奥書といった旧蔵者について推察しうる情報はない。寄贈者である岩崎久彌氏が集めたのか否か、そして岩崎家の所蔵となる前の来歴を示す記録も見受けられない。袋の記述に大きく信を置いて判断すれば、出版年の下限が江戸の最末期であるため、幕末から明治の初め、あるいはそれ以降の蒐集という推測ができる。しかし、この疑問にもう少し明確な言を紡ぐには、まず袋というものがどれ程残されてきたのか、そして後の世の愛好家にとって入手しやすいものであったのかを確認する必要があるだろう。袋が書物を保護するという目的のもと

図⑥　『白縫譚　五十二編』柳下亭種員作／落合芳幾画／菊寿堂／慶應三（1867）年【第五帖所収】

表一　年号別　袋絵数一覧

天明	（一七八一～一七八九年）	…五図
寛政	（一七八九～一八〇一年）	…三二図
享和	（一八〇一～一八〇四年）	…七図
文化	（一八〇四～一八一八年）	…四五図
文政	（一八一八～一八三一年）	…一〇図
天保	（一八三一～一八四五年）	…四五図
弘化	（一八四五～一八四八年）	…三図
嘉永	（一八四八～一八五五年）	…一〇図
安政	（一八五五～一八六〇年）	…二一図
万延	（一八六〇～一八六一年）	…二図
文久	（一八六一～一八六四年）	…三図
元治	（一八六四～一八六五年）	…一図
慶応	（一八六五～一八六八年）	…二図

に制作された、あくまで付属的な存在であったことを考えると、書物と共に揃った状態で残るという例がそれ程多いとは思えない。管見ながら他所での袋絵所蔵状況を調べてみると、まず東京都立中央図書館に収められている加賀豊三郎氏（一八七二～一九四四年）旧蔵書の中に楽亭西馬作、歌川国芳画の合巻『稲妻形怪鼠標子』（一八五二～五五年刊）初編をはじめ、相当数の袋が書物と揃った状態で伝えられていることが挙げられる。[7] また、二〇一〇年にサントリー美術館で開催された「歌麿・写楽の仕掛け人　その名は蔦谷重三郎展」では、蔦谷重三郎が天明から寛政にかけて出版した書物の袋として、個人蔵のものが五件出品された。[8]

おそらく個人の所有故に公に知られていないものは数多くあると思うが、袋というものが江戸、明治の読者にとってどれほどの価値を見出されていたのかを知る上でも、現存状況について今後更なる調査が必要といえるであろう。

以上が『書物袋絵外題集』の概要である。次章では袋絵の作者について、一例を紹介したい。

二　袋絵の作者について

袋に記載されている情報を一見すると、基本的に袋は書物の挿絵を描いた絵師による図を採用しているように思われる。しかし、一図ずつ調べてみると、天保年間（一八三〇年代）以降の袋には、挿絵と異なる絵師の落款が入るものが、多くはないが見出された。例えば、元治二（一八六五）年に出版された『風俗淺間ヶ嶽 十四編』【図⑦】には袋上部に題、作者と並ぶ挿絵師の名前「国貞画」とは別に、右下に落款と花押が入っている。落款には「惺々狂斎」と書いてあるため、この袋絵は河鍋暁斎（一八三一～八九年）によるものであることが分かる。風の吹く夜の草原で、こちらに背を向けて佇む男性、かと思いきや衣の下から見えるのは狐の尾と脚…。見ている者を引き込む画面構成や、

図⑦　『風俗淺間ヶ嶽十四編』柳水亭種清作／歌川国貞画／（袋）河鍋暁斎画／甘泉堂／元治二（1865）年【第四帖所収】

図⑧　『児雷也豪傑譚四十一編』柳下亭種員作／歌川国貞画／（袋）河鍋暁斎画／甘泉堂／文久四（1868）年【第四帖所収】

虚空を舞う化け狐の恐ろしい形相が独特の不気味な世界を生み出している。暁斎作の袋絵は、他にも『書物袋絵外題集』の中にいくつか収められている。柳下亭種員作『児雷也豪傑譚　四十一編』（文久四・一八六四年刊）【図⑧】も挿絵と袋の絵師が異なる作例である。本作でも書物の挿絵は二世歌川国貞、袋絵は暁斎が手掛けている。『児雷也豪傑譚』は蝦蟇の妖術をあやつる主人公、児雷也が活躍する物語であることから、袋絵にも蝦蟇に化けた児雷也の面が迫力をもって大きく描かれている。しかしながら、書誌情報の記載に負けぬ存在感で、一目で袋絵の作者を理解させる堂々たる落款である。暁斎は本作の五年程前から「狂斎」の名で錦絵などを本格的に描くようになるが、その卓抜した感性と技術でまたたく間に高い人気を得た。[9] そのような背景も踏まえると、若き絵師の生き生きとした自信すら感じられる。本編と袋を統一して当世の人気絵師が手掛けるというのも、読者にとって一つの魅力であろうが、一冊の書物で二人の絵師の腕と感性を楽しめるのは、実に喜ばしい読者サービスであったことだろう。同時に版元の販売戦略も感じられ、ここにも袋絵を知る意義と楽しさが見出される。

最後に梅素亭玄魚（一八一七～八〇年）という人物の袋絵を紹介したい。『書物袋絵外題集』の中に、玄魚が挿絵を描いた作品は確認できないが、[10] 隅にひっそりとその名が記されている袋は【図⑨】～【図⑫】の四点ある。【図⑫】の『しらぬひ（白縫譚）二十九編』（万延元・一八六〇年）は書物の表紙が彩り豊かで華やかなシリーズだったため【図⑬】、袋はあえて題箋的な機能のみに留めたのだろうか。しかし、その他の三点をよく見ると、大胆な構図で目を楽しませるというより、落ち着いて品格のある、洗練された美しさが感じられる。いずれの図も、モチーフを全面に散りばめる、あるいは一点を大きく中央に配置するというより、主要なモチーフは画面の右下、もしくは左下に纏

図⑩　『神刀波白鞘　第六編』
笠亭仙果作／二世国貞画／（袋）玄魚画／錦森堂／万延元（卯の初秋・1860）年【第六帖所収】

図⑨　『新吉原細見記』
玄魚画／万延元（卯の初秋／1860）年【第三帖所収】

図⑫　『白縫譚二十九編』
柳下亭種員作／歌川国貞画／（袋）玄魚画／廣岡屋版／万延元（1860）年【第五帖所収】

図⑪　『弓張月　十二編』
楽亭西馬作／歌川国輝画／（袋）玄魚画／錦昇堂／安政元（1855）年【第四帖所収】

図⑬　『白縫譚』初編上（右）、二編下（左）表紙
柳下亭種員作／三世歌川豊国画／嘉永二～三（1849～50）年

図⑭　『名所江戸百景』目録
歌川広重画／（目録）玄魚作／安政三～五（1856～58）年

められている。この様な整理された構図は、華やかな物語の表紙、挿絵と良い対照をなしているといえよう。これらの袋絵を描いた玄魚について、以下で紹介したい。

樋口弘氏が編纂した「幕末・明治の浮世絵師伝」[11]によると、梅素亭玄魚（本名・宮城喜三郎）は経師屋の息子として生まれた。本の装丁には馴染みの深い生い立ちだったのである。若き頃より摺り物の図案や袋絵の意匠を考案し、戯画や風刺画なども残した。安政二年の大地震の直後に流行した鯰絵を考案したのも玄魚であるという。自ら絵を描きはするが、純粋な絵師というより、様々なメディアで企画をたて、意匠を考案する、現代でいうところのプロデューサー、デザイナーに近い存在だったのであろう。安政三～五（一八五六～五八）年にかけて刊行された、歌川広重の代表作『名所江戸百景』に付された目録【図⑭】の制作は、玄魚が残した業績の中でも特筆に値すべきものである。当時最高の人気を誇る名所絵シリーズの目録を任されていることから、玄魚が文芸界で豊かな人脈と信頼を得ていたことがうかがわれる。筆者は

未見であるが、国文学研究資料館が作成、公開している「日本古典籍総合目録」で調べてみると、玄魚が建具の雛形本の作画や、『番匠作事往来』という大工の教科書のような書物の編著など、幅広い書物の執筆に携わっていたことが分かる。[12] また、河鍋暁斎、歌川国周らが季節折々の江戸の風景を描き、各図に歌を付した双六の作・監修例も確認できた。[13] 書物の題字なども含めれば、玄魚が残した功績は、更にその数を増していくだろう。このようにバラエティ豊かに当時の出版物に携わっていく中で、彼の人的なネットワークは豊かに広がっていったのである。

制作者一人を知るだけでも、江戸の出版文化が様々な媒体とそれぞれに携わる人たちが横断し、繋がることで、時により良質な文芸を、時により多くの人々が喜ぶ娯楽を提供し、形成されてきたことに改めて気付かされる。袋絵の情報を解き明かしていくことは、これら連環して生み出されていく文化を知るために必要な作業といえるだろう。

おわりに

本稿では、東洋文庫蔵『書物袋絵外題集』について、その概要を紹介することを中心とした。本来ならば、全図の画像と目録をそろえて掲出すべきところだが、その数の多さから未だ目録を完全な状態にできていないというのが現状である。一つ一つの袋を考察していく中で気付くのは、袋に記された題が、包まれた書物の題と完全に一致しない場合もあるということだ。中には作者と絵師の名前、版元まで記載されているが、題の記載はないものもある。

限られた情報を繋ぎ合わせて、いくつかの候補と照合していく作業が当面の課題であろう。また、可能な限り各袋

絵に対応する書物の表紙、テキスト、挿絵がどの様なものなのかを知りえるだけの情報をそろえたいと考えている。現存が確認できない書物の袋絵が存在し、最低限の書誌情報が示されるだけでも、膨大なピースで形成される江戸の出版物というパズルの、僅か一つでも埋める手立てとなるであろう。まして、書物が世に出た当初の姿を知ることができれば、時代の変化に応じてどの様に人々の趣向が変化していくのか、販売元がどのような戦略を盛り込んでいるのか、書物の内容とはどの様に連動しているのか、実に多様な発見を得られると考える。

全図と完全なる目録の掲出を一日も早く果たすべく、再び画帖の頁をめくり思案をめぐらしていきたい。

注

（1）「東洋文庫要覧」（財団法人東洋文庫　二〇一一年十一月）による。

（2）和田万吉、樋口慶千代 編「岩崎文庫和漢書目録」（財団法人東洋文庫　一九二四年）。

（3）袋の基本的事項は、木村八重子「造本の工夫」（「草双紙の世界」　ぺりかん社　二〇〇九年　所収）を参照した。

（4）書誌学的な観点から、作者、作品、版元、草双紙の目録など、江戸の絵入り本に関する総合的な調査・研究を行ったものとして、漆原又四郎「近世の絵入り本」（蒼裳堂書店　一九八三年）があげられる。また、版元、書店から見る、江戸時代の出版事情、大衆への書物文化の広がりに関しては、今田洋三「江戸の本屋さん」（平凡社　二〇〇九年再刊）に詳しい。絵本の流通、受容、テキストと図の関係性、絵師考など、あらゆる角度から絵本について考え、読み解いていく研究として鈴木淳・浅野秀剛編「江戸の絵本　画像とテキストの綾なせる世界」（八木書店　二〇一〇年）が挙げられる。この他にも、近世絵入り本に関する論考は数多く存在するが、本稿ではこれらの研究書を主に参考とさせていただいた。

（5）書物の型については、中野三敏「和本の海へ　豊穣の江戸文化」（角川選書　二〇〇九年）の凡例を参考とした。

（6）袋から書物を特定し、基本的な書誌情報を調べる際には、「国書総目録」（岩波書店　一九九一年増訂）、国文学研究資料館編「古典籍総合目録」（岩波書店　一九九〇年）を主に参照した。

（7）『稲妻形怪鼠標子』の袋は東京都立中央図書館のホームページにて、本編の表紙と共に画像が公開されている。また、筆者が同館の特別文庫室にて、袋絵の所蔵状況についてうかがった所、年代は定かではないが、加賀文庫だけでも数十冊の書物が袋をともなって保存されていることが分かった。

（8）「歌麿・写楽の仕掛け人　その名は蔦谷重三郎」（サントリー美術館　二〇一〇年）。なお、本展には、東洋文庫蔵『書物袋絵外題集』から天明～寛政年間の袋絵四図が出品されている。

（9）二〇〇八年に河鍋暁斎の作品を網羅的に出品する展覧会が開かれた。暁斎の生涯と作画活動については、この際に刊行された図録「絵画の冒険者　暁斎　Kyosai―近代へかける橋―」（京都国立博物館　二〇〇八年）に詳しい。

（10）図⑨の『新吉原細見記』で、玄魚は序文を書いている。

（11）樋口弘「幕末明治の浮世絵師伝」（「幕末明治の浮世絵集成」所収　味灯書屋　一九六二年増補版）。

（12）「古典籍総合目録」については、（注6）に記載。

（13）早稲田大学総合図書館のホームページで公開されている「古典籍総合データベース」にて本作の画像を見ることができる。書誌情報は左記の通りである。

『宝山松開花双六』　梅素亭玄魚作／梅素ほか画／刊行年不明／刊行元　森田重兵衛

本稿は公益財団法人ポーラ美術振興財団より助成を受けて（「東洋文庫所蔵絵入り本の全容解明に向けての基礎的研究―近世東アジアにおける都市民衆文化のパースペクティブから―」）、昨年行った岩崎文庫絵入り本調査による成果の一部です。

公益財団法人ポーラ美術振興財団をはじめ、左記の関係各位の皆様にご助力、ご教示を賜りました。記して心より御礼を申し上げます。

家田奈穂氏、出光佐千子氏、大口裕子氏、鎌田純子氏、日野原健司氏、牧野元紀氏、伊藤千尋氏、小嶌いつみ氏（順不同）

（東洋文庫研究員・普及展示部学芸員）